読売俳壇

矢島　渚男　選

冬銀河糸通したい星ばかり　行田市　吉田　春代

【評】星を糸で結びたいとは、ビーズ作りがよほど好きな人なのだろう。冬の星はキチッとしているから、星座を糸で繋ぎたい気持ちや発想が起こったのだろう。面白い句だ。

ここも昔は富士が見えたと梅見茶屋　東京都　尾碕　三美

【評】茶屋の主人の嘆きの言葉をそのままの句。何故見えなくなったかは言外にある。いま、梅の開花は確実に早くなっている。

少女採り干した雁皮を紙に漉く　長岡京市　みつきみすず

【評】ガンピは高級和紙の原料である。少女が採集して丁寧に乾燥した野生の木の皮を使い、感謝しつつ紙を漉いているところ。

おんぶした赤ちゃん届く吊し雛　入間市　角貝　久雄

恋猫の尾は健やかに愛を告ぐ　高槻市　黒田　豊子

冬晴れやいつもと違ふポストまで　国分寺市　加藤　武夫

捨てられぬ火鉢廊下の突き当り　佐野市　村野　則高

振り洗ふ絵筆三本水温む　東大阪市　土屋　鉄男

これまでもこれからも寡婦冬銀河　宇都宮市　大門とよ子

手を合せどんど見てゐる人ありぬ　会津若松市　星　静子

高野ムツオ　選

地の神に捧げるごとく椿落つ　呉　市　青木　紘二

【評】椿が咲き、やがて実を結べるのも大地を司どる神、地母神のお陰。椿の木はそう思って自らの花を捧げる。神話世界を踏まえた発想が魅力。

さておいて子には食べよとほうれん草　大垣市　大井　公夫

【評】わかる。あの根の赤いところ。作者も子供の頃、嫌いだった。しかし、栄養満点。「美味しいよ」と今は子供に勧める。

靨ってかわいくない字ほうれん草　名古屋市　山守　美紀

【評】靨は厭な顔とも読める。でも靨は頬にできた窪みを指す形声文字。古代の人も可愛いと思っていた。ちぢみほうれん草も可愛くて美味い。

われら地震列島の民冬椿　高岡市　野村あけみ

東北の寒さの生みし訛かな　大分市　加藤　元二

見掛けぬが今もどこかで猫の恋　白井市　毘舎利道弘

寒卵の影に重さのありにけり　高槻市　村松　譲

寒明や砂山の影砂に伸ぶ　川越市　大野宥之介

水仙に過ぎし列車の震えまだ　神奈川県　石原美枝子

瑕ひとつなき青空の寒さかな　佐野市　田中　礼子

正木ゆう子　選

外が好き夜が好きなり雪兎　小山市　松本　喜雄

【評】外が好きで夜が好きな人間って居るなと思って読むと、これは雪兎の話である。夜遊びが好きなのではなく、家の中に居ては溶けてしまうから。雪兎に魂があるような句。

ざくざくと霜柱踏み家出かな　西東京市　永井　康信

【評】家出というと物々しいが、家族に反対されて、家出同然の門出ということだろう。歯切れの良い「ざくざくと」が、勢いを感じさせる。

立ち位置を心得てをり梅の花　香取市　嶋田　武夫

【評】庭の主役となる梅も無いではないが、花が小さいせいか、どこか控えめで脇役的な梅の花。しかし、だからこその梅の存在感でもある。

もっこすの貌でどすこい晩白柚　水戸市　加藤木よういち

前の世も後の世もなく春炬燵　川越市　益子さとし

重力に逆ふやうに雪がふる　石狩市　赤繁　大河

切株も宇宙のかけら春を待つ　池田市　後藤　和豊

白鳥のたつぷりととる助走距離　対馬市　神宮　斉之

目尻下げ口角上げて春を待つ　白井市　毘舎利愛子

女子会にまぜてもらふや老の春　福岡県　松養　花子

小澤　實　選

冷たくはないのかピアス五個の耳　横浜市　三好れいこ

【評】ピアスが五個つけられた耳を見て驚いている。この句だけでは男女どちらかはわからないが、金属が光って、いかにも冷たそうだ。驚きをストレートに詠んだのがいい。

保線夫のひとりは見張り雪煙　那須塩原市　谷口　畔水

【評】保線夫が出て雪後の線路を整備している。うちのひとりは見張りに専念。安全のため必要なのだ。雪煙が立つとはかなりの降りだった。

恋をして座頭鯨のうたいけり　東京都　松永　京子

【評】座頭鯨は、海の中で恋をして、雌を呼ぶために歌までうたうという。鯨だけでは冬の季語だが、鯨の恋は春になるのかもしれない。

大寒の天地あくまで澄みわたる　太田市　阪本　和夫

新妻に汲まれときめく白魚かな　津　市　中山　道春

マネキンのスキンヘッドも春めきぬ　松山市　久保　栞

猪の罠仕掛けある寺の裏　下田市　森本　幸平

モルヒネを打ち勝鶏の傷を縫ふ　名古屋市　可知　豊親

掛軸の寝釈迦に香を焚きにけり　宝塚市　広田　祝世

酌み交はす手の止まりたる霰かな　土浦市　小川　智昭

俳句あれこれ　池田澄子（俳人）　ときめき永久に ③

俳句形式に心を動かされたのは三十歳代も終わりに近く、そのことに、私自身がとても驚いた。そして偶然のように買った「俳句研究」という今は無い俳句雑誌は、その私を一層驚かせ引き込みました。編集長は高柳重信で多く若手の論客に書く場を与えていました。

そして毎年十一月号は「五十句競作」という重信の選が行われていて、発表される作品の俳句の広さ深さに心躍りました。いつか私もその選を受けようと決めながら、「いつか私も」が、「今年は私も」になる直前に、重信は突然亡くなられた。その競作で攝津幸彦を知り、深く憧れました。

この句です。絶句しました。

＜南国に死して御恩のみなみかぜ　幸彦＞。私の父は漢口で戦病死し、母の弟はニューギニアで戦死、多分餓死。この「御恩」の哀しさ。皮肉だけでは済まないゴオンという音、平仮名の「みなみかぜ」の不確かな温度。俳句形式って凄い詩形式。

題字デザイン・イラスト　福田美蘭